

大会後記

コロナ禍における大会を終えて

第63回日本神経化学学会大会 大会長 馬場 広子, 実行委員長 山口 宜秀
東京薬科大学薬学部

第63回日本神経化学学会大会は、単独大会として2020年9月10日(木)から12日(土)まで八王子市いちようホールで開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響によりWeb開催となりました。当初から予定されていた3日間、2つのZoom会場において各種シンポジウムや講演および企業協賛セミナーを行い、参加者にオンタイム・ライブ配信しました。また、若手道場およびポスター(一般口演含む)は5分間あるいは3分間のビデオ形式で、この期間中にコアタイムを設けるとともに、9月9日(水)から26日(土)までオンデマンド配信を行いました。参加登録者は373名(演題数215)で、これまでの単独大会と比較しても少ない数でしたが、各シンポジウム等では音声による質疑応答が活発に行われました。また、11日、12日の昼に行われた若手道場コアタイムではテキストディスカッション形式にも関わらず非常に盛況でした。これもみなご参加の皆様および準備等に関わったすべての方々のご協力の賜物と感謝申し上げます。

最初に本大会のあり方を実行委員会で検討し、会場数を4程度に絞った上で各会場での議論が活発になるよう工夫すること、大会独自の企画としてミクログリアの基礎から臨床まで3つのシンポジウムからなる「ミクログリアまつり」を行うこと、また、神経化学分野の研究の面白さを知ってもらう目的で八王子市や多摩地区の大学生を対象とした公開講座を行うことなどを決めました。Web開催に変更後さらに2会場に減らし、ミクログリアまつりのほか、従来行われている理事会シンポジウムや優勝賞受賞者企画シンポジウムなど

の企画プログラム、特別講演や教育セミナー、14の公募シンポジウム、3つの企業協賛セミナーをZoom Webinarで実施しました。一方、大学生対象公開講座(講師:岡野栄之先生)は12日午後に別のZoom会場で行い、多摩地区以外の学生を含め95名の参加がありました。1時間の講演後参加者から多くの質問があり、30分の質疑応答時間では足りないほどでした。これらのほかに、Web開催の気軽さを生かし、急遽9日および11日夜にRemoを用いたソーシャルアワーを設け、さらに11日夕方には岡野先生を講師としてCOVID-19関連セミナーをZoomで実施しました。ご担当いただいた田中謙二先生、岡野先生に感謝いたします。

大会終了後に行ったアンケート調査では、様々な事情で現地に行けない人も参加できる、移動時間を節約できる、パワーポイント資料がみやすい、集中して聴きやすい、オンデマンド配信では何度も聴き直すことができ理解しやすいなどのWeb開催の利点があげられました。また、主催者としては、現地開催に比較して経費をある程度抑えることができ、企業等から多くの寄付がない状態でも開催できる、Zoom等を利用して会場を増やすことができるなどの利点がありました。一方で、現地開催と違って新たな出会いや人とのつながりができにくいなどの意見が多くみられました。また、セキュリティーの担保が難しいことから、発表者の希望により誌上発表になった演題もありました。アンケートの自由記入欄でも、「Web開催の良さを知ったが、やはり現地開催が望ましい」という回答が多くみられました。今後、大会

は現地開催を基本とするとしても、学会員への情報発信の手段として Web をうまく生かしていくことが重要と感じました。

第13回若手研究者育成セミナー（世話人代表：石橋智子、副代表：大谷嘉典）に関しては、若手育成委員長の照沼美穂先生を中心に委員会で議論していただき、9月9日(水)午後から Zoom で開催しました。従来のような密な交流はできませんでしたが、著名な講師の先生方のセミナーを聴き、お話しできたことは参加者にとって貴重な体験だったと思われまます。若手育成委員会には若手道

場の運営も含めて大変お世話になりました。

東京都では、10月に入っても連日100名以上の新規感染者数が報告されています。コロナ禍で在宅勤務や Web 講義、実験の中断などさまざまなことを経験し、価値観や働き方などについて改めて考える機会となりました。これからのポストコロナの時代に向けて、今後の学会や大会のあり方に関しても考えていくことが大事ではないかと思ひます。

最後に、すべての関係者の皆様に改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。